

# 放浪しながら切り拓いた軌跡



首都大学東京理学部 生命科学専攻  
植物生態学研究室 可知直毅教授 最終講義

日時：2019年3月14日 17時  
国際交流会館 大会議室（第17回教室セミナー）

本学で23年余りにわたり教鞭をとられた可知直毅教授が2019年3月で理学部をご退職されます。可知先生は、植物を材料とした生理生態学，個体群生態学，群集生態学，生態系生態学など幅広い分野で研究を展開されてきました。最終講義では，この“軌跡”についてお話いただきます。ぜひご参加ください！



阿字ヶ浦砂丘(1977年)



固有植物オオハマギキョウ  
測定中(小笠原・東島)



オオマツヨイグサ(博士論文の材料)1983



Forest Research Institute of Malaysia(1991)

[教室セミナーのお知らせ]

日時：3月14日17時00分～ 場所：国際交流会館・大会議室

## 放浪しながら切り拓いた軌跡

可知 直毅（首都大学東京・大学院理学研究科）

---

小学校の担任の先生に「落ち着きがない」と見破られた。これまでの40年あまりの研究人生を振り返って、新しそうな複数のことに同時に興味が行ってしまい、ひとつの分野を脇目も振らず研究に打ち込むということができない性分であることを改めて認識した。まさに放浪しながらの研究人生であった。たとえば、自分の感覚を信じて試行錯誤しながら、ハイマツの藪の中に鉋でガシガシと道をつくるような感覚である。

海岸砂丘の植生分布と土壌環境の関係を、当時生態学分野で使われ始めた多変量解析の手法を使って調べた研究が修士の仕事となった。この研究は、群集生態の範疇に入る。ところが、その裏で、砂丘土壌の栄養条件を植物の成長反応から評価する栽培実験や（これは生理生態学の分野）、砂丘にひろく分布していた二年草のオオマツヨイグサの個体群統計の調査も（これは個体群生態学そのもの）やっていた。こんな方向性の異なる研究を同時にすすめることを指導教員がよく許して（黙認して）くれたものである。

1995年7月に、つくばの国立環境研究所から都立大に移り、小笠原をフィールドにした研究を始めた。ここでも、固有植物の個体群生態学と生活史の研究から入り、外来生物と在来生物との相互作用の研究（群集生態学）に関心が拡がり、さらに、ここ10年ほどは、外来生物を駆除した生態系がどう変わっていくかという生態系生態学の研究を中心に進めている。白状すると、修士の仕事の裏でやっていた土壌の栄養環境に対する植物の成長反応に未練があり、小笠原の植物を材料に再チャレンジしたいと考えている。

おおざっぱな性格で、何事も詰めが甘いところがあり、これまで多くの同僚、学生、その他の関係者に迷惑をかけてきた。お詫びするとともに、今後少しでも恩返しができると思う。